

接尾辞「中」に先行する動名詞の時間的特徴

佐伯亮則

キーワード：動名詞，「中」，限定性，時間的な幅，過程，結果状態

要 旨

どのような場合に、動名詞が「中」に先行するのかを分析する。本稿では、動名詞が「中」に先行する条件を、先行研究を参考にして、「動名詞の指し示す出来事の動作過程や結果状態が限定されうる時間的な幅を持つ」とする。この条件に該当する動名詞の特徴を調べるために、動名詞が指し示す出来事の時間的な構造を基に4つの素性〔±過程の時間的な幅〕〔±過程の終了〕〔±結果状態〕〔±結果状態の終了〕を抽出し、素性の組み合わせから7つのタイプ（A～G）を設定した。この分析により、限定されうる時間的な幅を持つ動名詞は、〔+過程の時間的な幅〕〔+過程の終了〕か、〔+結果状態〕〔+結果状態の終了〕のパターンになっていることを示す。最後に、「動名詞+中」を見る限りでは不自然な動名詞でも、文や文章のレベルにおいて、条件に合致する情報を加えることによって、「中」に先行しうることを示す。

1. はじめに

動名詞^{*1}が接尾辞「中」に先行すると（以下、「動名詞+中」）、全体で“～している最中だ”という意味を表し、動作や動作終了後の結果状態が続くことを表す（例：列車が駅を通過中だ。この入り口は現在閉鎖中だ）。しかし、全ての動名詞が「中」に先行できるわけではない（例：*彼は結婚中だ。*高校を卒業中だ）。では、どのような動名詞が「中」に先行するのか。本稿では、動名詞が「中」に先行する条件を分析する。

*1 格助詞を接続できるという名詞的性質と、項構造を持ち、その項がガ格句やヲ格句などになるという動詞的性質を合わせ持った語。影山 1993 参照。

2. 先行研究の整理

2.1. 「故障中」は自然な表現か

先行研究の立場の違いを端的に表すのが、「故障中」である。

柏野 1979, 国広 1991, 岩野 1994 は、「故障中」を不自然だとみなす立場を取る。柏野は「最近よく見かけerようになった「故障中」という表現を軸に、これは日本語として不自然なのではないかということ立証するために」(101 ページ) 研究を行っている。国広は、電気按摩器に「故障中」と張ってあるのはおかしく「故障」とすべきだという雑誌の投書に対し、投書者の語感が正しい、ということ述べている。岩野には、冒頭に「町の中で「故障中」という貼紙を目にすることがよくある。(中略)よく考えてみると、やはりちょっとおかしい」(34 ページ)とある。

一方、水野 1984, 大和田 1997 は、「故障中」を不自然でないとみなす立場を取る。ただ、水野は、不自然でないと認めざるを得ないと考えているようである。修理して元どおり作動させることで、故障した後の状態がいつか終わると予想でき、「故障中」が広く使用されているのも理解できることが示されている。大和田は、特に説明していないが、「故障中」を自然な語例として挙げており、自然だと考えていることがわかる。

「故障中」以外でこの立場の違いを反映するのが、「停電中」である。「故障中」を不自然とする岩野には、「失恋・死亡・故障・変色・連想・散乱・停電・入荷／などのように、(略)「～中」の形にすると不自然になる(以下略)」(39 ページ。「/」は原典での改行を表す。下線は本稿筆者による)とある。一方、「故障中」を不自然でないとみなす水野は、「「停電中・断水中」なども、これ(補足:「故障中」を指す)と同様な例として考えることができるであろう」(92 ページ)とある。どちらの立場も、「故障中」と同様に扱っている。

「故障中」などをめぐっては、なぜこのように扱いが異なるのか。この問題は後で検討する。

2.2. 「故障中」を不自然とみなす研究の根拠と問題点

「故障中」を不自然とみなす柏野 1979, 国広 1991 は、[意思性]という概念を用いて分析している。

柏野は、金田一 1950 の継続動詞・瞬間動詞と[意思性]を組み合わせる交差分類を行う。そして、「S-CHU 結合(補足:瞬間動詞+「中」)の場合、挿入動詞は、人間の意思により、始めたり、終わらせたりすることのできる、いわゆる意思動詞

でなければならない」(105 ページ)とする。そのため、瞬間無意思動詞は〔+temporary〕*²と無意思とが矛盾するため、つまり、結果状態の終了が主体の意思によってなされることと、動詞に〔意思性〕がないことが矛盾するため、「中」に先行できないとしている。国広にも、「動名詞+中」は、「〔人間が主体であるとき〕に使われるのである」(68 ページ)とあり、たとえば「冷房中」の主体は機械ではなく人間だということを述べている*³。

しかし、この〔意思性〕を用いた分析には問題がある。まず、国広は主体が人間に限られるというが、「連日気温が上昇中だ」という例は、人の手が及ばない出来事のため、反例になる*⁴。意思動詞は継続・瞬間に関わらず可能であると柏野が述べていることに対しては、水野が「意思動詞でも「*退学中」「*結婚中」は、一般的には不可能であろう」(91 ページ)と批判している。また、柏野は、「中」に先行できない瞬間無意思動詞の例として「故障(する)」1例しか挙げていない。そこで、本稿筆者がこれ以外の例を探してみたところ、「妊娠(する)」「失業(する)」が得られた。「失業(する)」については、柏野に言及がある。柏野は、これが無意思動詞であることを認めた上で、主体が人間であり、「再び戦につく」という動作をする意思があることによって「中」に先行できると、国広の「冷房中」と同じように説明している。しかし、無意思動詞に〔意思性〕が認められると解釈すると、瞬間無意思動詞は「中」に先行しないという条件と矛盾することになってしまう。「妊娠(する)」も、主体が人間であっても、この動作を行うための意思はない。よって、瞬間無意思動詞であるが、「妊娠中」は許容される。本稿筆者の調査で実例が得られている。

以上のことから、柏野と国広のように〔意思性〕を用いても説明がつかない。

*2 〔+temporary〕は、柏野が提唱した「瞬間動詞+中」の特性である。結果状態がいつまでも続かない、臨時的なものだということを示す特性である(103 ページ参照)。柏野は、「瞬間動詞+中」は必ず結果状態が終了すると考えているのである。

*3 以下は、国広からの引用である。

「冷房中」とか「しも取り中」とか一見機械が主体のように見える例もあるが、これもやはり「人間が部屋を冷房中」「人間が冷蔵庫のしも取り中」なのである(69 ページ)。

*4 柏野はこれを継続無意思動詞に分類しており、許容されるものとして扱っている。同じ〔意思性〕を用いた説明でも、動名詞全体に適用する国広と、瞬間動詞のみに適用する柏野とで意見が異なる。

2.3. 「故障中」を不自然とみなさない研究の根拠と問題点

「故障中」を不自然とみなさない水野や大和田はどのように説明しているか、見てみることにしたい。

瞬間動詞には [+ temporary] という特性があると柏野が述べていることに対して、水野は、継続動詞に相当すると思われる「継続動作を表わす語＋中」も、「全て [+ temporary] という特性を持っていると考えてよいと思われる」（91 ページ）とし、継続動詞は全て「中」に先行できると述べている。これに対して、大和田が、継続動詞でも主観的な精神的活動を表す語（?心配中、?信仰中、*希望中、*期待中）は「中」に先行する動名詞になれないことを述べている。しかし、動作がいずれ終了するとは見込めない「地球が自転する／公転する」というときの「自転」「公転」は、主観的な精神的活動に属さないとされるが、「*自転中」「*公転中」は許容されず、大和田の記述でも説明しつくしたとは言えない。

以上のように継続動詞や瞬間動詞という概念を用いても、十分な説明ができない。

2.4. 解決の糸口「限定されうる時間的な幅を持つ」

これらの問題点を解決するには、どのような説明が最適か。

「故障中」を不自然とみなす柏野・国広の分析は、説明としては不十分だったが、そこには「動名詞＋中」が“動作や状態が一時的である”という性質を持つとの興味深い記述が見られた。柏野はそれを [+ temporary] で示し、国広も「ある状態なり動作なりが一時的にそうである、ということであり、やがて終りになるという含みを持っている」（69 ページ）としている。柏野や国広は、この性質を副次的なものとして捉えているのに対し、「故障中」を自然とみなす水野は、柏野の [+ temporary] を「動名詞＋中」全体に拡大して、「中」に先行できるかどうかの根拠として扱っている。

これと同様に、岩野は、瞬間動詞語幹が「中」に先行できる根拠として、以下の2点を挙げる。1つは「婚約中」に対して「*結婚中」が不自然であるように、（おそらく結果状態の）始めと終わりが明確でなければならないことである。もう1つは「*発射中」が不自然であるように、行為の結果が残存しなければならないことである。大和田の「範囲指定」も、この岩野の記述と同様の主張であると考えていいだろう。

しかし、岩野の“明確”という主張は強すぎる。「上昇(する)」は Vendler1967 と言えば Activity に分類されるため、終了せずにいつまでも続く出来事である。始

めと終わりが“明確”であるなら、「10℃から20℃まで」「地上から上空30メートル地点まで」のように、始点と終点が必ず明示されなければならないはずである。しかし、いずれも明示しない「現在気温が上昇中」「熱気球が上昇中」は、ともに自然である。たしかに開始や終了は必要だが、“明確”である必要はない。その文が終わりを念頭に置いて発話されているかどうかは関係ない。あくまでその動名詞が表す出来事が限定されうるかが重要なのである。

以上をまとめると、動名詞が「中」に先行できる条件は、以下のようになる。

(1) 動名詞が「中」に先行するための条件：

動名詞の指し示す出来事の動作過程や結果状態が、限定されうる時間的な幅を持つ

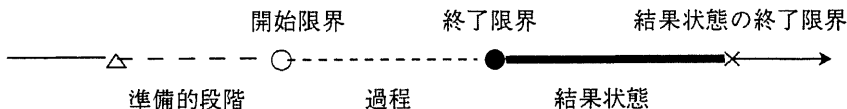
次節では、この条件に合致する動名詞を調べるための方法を提示する。

3. 出来事の時間的な構造から素性を抽出する

「動作過程や結果状態が、限定されうる時間的な幅を持つ」とはどういうことなのか。それを分析するため、動名詞が指し示す出来事が時間的にどのような構造になっているかに着目する。

金水 2000 は、(2)のように、動詞が指し示す出来事のいくつかの段階を示して、テイルの諸用法を説明している。本稿が注目すべき点は、それぞれの段階に範囲となる期間（時間的な幅）がありえること、各段階を限定するような時点が設定できることである。

(2) 出来事の時間的な構造（金水 2000, 16 ページ）



これを参考に、先にまとめた条件のうち「限定されうる」「時間的な幅を持つ」ということについて、以下で検討する。まず「時間的な幅を持つ」ことについて考察し、次に「限定されうる」こと（限定性）について考察する。その後で、本稿の

分析に有効な素性と、その組み合わせによって設定できるタイプを示す。

3.1. 時間的な幅

まず「時間的な幅を持つ」ことについて考える。それは、ある動名詞について、(2)のような時間的な構造を書くとき、点でなく、線分のように、一定期間持続していなければならないということだと言える。「営業中」「走行中」は、「営業（していること）」「走行（していること）」が一定期間続くが、「発見（していること）」は期間になる要素がなく、「*発見中」も許容されない。よって、期間となる時間的な幅が必要なのである。このような時間的な幅を持ちうる段階として、準備的段階、過程、結果状態の3つが認められる。以下は金水による各段階の説明をまとめたものである。

準備的段階は、動詞の語彙の意味に含まれない、「猫が魚を食べようとしている」という表現で捉えられるような段階である。過程は“運動の主体の活動”が行われる段階である。動詞によっては、この過程に時間的な幅がないものもある。結果状態とは、“動詞が表す出来事が達成されたときに必然的にもたらされる状態”のことである。動作の主体（主語の指示対象）に生じる結果状態と、客体（目的語の指示対象）に生じる結果状態があるが、テイルの結果相解釈は、動作の主体に生じる結果状態に限られる（本稿で扱う「(動名詞+)中」も、主体の結果状態に限る）。

金水はテイルの記述のためにこの構造を示しているが、本稿ではこの構造を、「中」に先行する動名詞の記述に応用する。動名詞に～ヨウトスル、～ツツアルを接続すれば、準備的段階を表現することができるが、「動名詞+中」にこれらが接続できないため、準備的段階の用法が取り出せないのである。様々な使用例を探してみても、準備的段階を時間的な幅としている「動名詞+中」は、まずない^{*5}。よっ

*5 CD店やゲーム店の商品陳列棚に「この商品はただいま入荷中です」と書かれていることがある。その商品が品切れのときにこのように表示している。「入荷（する）」という語は「店に荷物が入る（届く）」という意味であり、「入荷」が意味する出来事に過程はなく、「入荷中」は過程を時間的な幅としているとは言えない。結果状態の時間的な幅だとすると、もう商品が届いていることになり、品切れの状態を示すという使い方に合わない。この「入荷中」が指し示す出来事は、商品が店に届く前の段階であるから、店に入荷するのを待っている間、つまり「入荷待機」「入荷待ち」の最中を意味している。よって、準備的段階を時間的な幅とみなした表現としか言いようがないのである。本稿筆者の知る限り、準備的段階の用法はこれのみである。

て、「中」で取り出せる時間的な幅は、過程と結果状態の2つに絞られる。

3.2. 限定性

動名詞が「中」に先行するには、時間的な幅があればいいだけではない。「婚約(する)」「結婚(する)」はどちらも結果が持続するのに、「婚約中」は自然なものに対して、「*結婚中」が不自然であることからわかる。では、「婚約」と「結婚」の違いは何か。それは、時間的な幅が限定されるものであるかどうか(限定性)の違いである。時間的な幅を限定できるかどうかは、始点と終点を定められるかで決まる。(2)の図でいえば、過程の始点と終点は開始限界と終了限界であり、結果状態の場合は結果状態の開始限界(すなわち過程の終了限界)と結果状態の終了限界である。

このうち、どちらも、始点は(明確でないとしても)必ず存在するため、取り上げる必要はない。動作や行為が始まらなければ、その最中でありえるはずがなく、過程が終了しなければ(つまり結果状態が開始しなければ)、そもそも結果状態が生じないからである。

よって、注目すべきは終点である。各段階の終点である過程や結果状態の終了限界を特定でき、時間的な幅を限定することが可能な動名詞が、「中」に先行できるのである。たしかに意思動詞なら終了をコントロールできるかもしれない。しかし、過程や結果状態を意図的に終わらせることができなくても(意思性がなくても)、その言及する出来事を限定的なものとして扱うに足る要因があればよい。たとえば「故障(する)」の場合、結果状態の終了と見なせる要因は、誰かが修理することである。故障の主体の働きかけがなくても、終了は特定できるのである。

3.3. 素性の抽出

ここまでの考察を踏まえて、「中」に先行できる動名詞であるかどうかを判断する上で有効な素性として、次の4つを挙げる。

- ①過程に時間的な幅があるか [±過程の時間的な幅]
- ②過程の終了が特定できるか [±過程の終了]
- ③過程の終了後に結果状態が生じるか [±結果状態]
- ④結果状態の終了が特定できるか [±結果状態の終了]

①③は時間的な幅を持つかに関わる素性で、②④は限定性に関わる素性である。

そして、これらのプラスマイナスの組み合わせから、実際にはありえないと思われる組み合わせを除いて*6、すべての動名詞が、必ずいずれかに分類できるような7つのタイプを、以下のように設定する。

- A [+過程の時間的な幅] [+過程の終了] [+結果状態] [+結果状態の終了]
- B [+過程の時間的な幅] [+過程の終了] [+結果状態] [-結果状態の終了]
- C [+過程の時間的な幅] [+過程の終了] [-結果状態] [-結果状態の終了]
- D [+過程の時間的な幅] [-過程の終了] [-結果状態] [-結果状態の終了]
- E [-過程の時間的な幅] [+過程の終了] [+結果状態] [+結果状態の終了]
- F [-過程の時間的な幅] [+過程の終了] [+結果状態] [-結果状態の終了]
- G [-過程の時間的な幅] [+過程の終了] [-結果状態] [-結果状態の終了]

次の4節では、各タイプに当てはまる動名詞と、各タイプに属する動名詞が「中」に先行できるかどうかを分析する。

4. 「動名詞+中」使用例の分類と各タイプの分析

AからGまでの7つのタイプにはどういう動名詞が属するのか、実際に使用された「動名詞+中」はどのタイプに属するのか、あるいは偏るのかを、本節で詳しく見ていくことにする。実際の使用例として、新聞記事の調査*7 から得た「動名詞+中」の用例を分類する。

用例を判断する際に、①を調べるテストフレームとして、テイルが進行相で解釈できるかを調べるために金水 2000 で用いられている「今（ A ）している最中だ」を使用した。③を調べるテストフレームとして、テイルが結果相で解釈できる

*6 [-結果状態] [+結果状態の終了]（結果状態が生じずに結果状態が終了）や[-過程の終了] [+結果状態]（過程が終了せずに結果状態が生じる）、[-過程の時間的な幅] [-過程の終了]（瞬間的で終了しない動作）のような組み合わせは、現実には起こりえないと思われるため除いた。

*7 実際に使用された「動名詞+中」にどのようなものがあるかを調べるため、毎日新聞 2000年1月から6月の各月1～5日付の新聞記事（朝夕刊）から、「動名詞+中」の使用例を採取した。

かを判定するために、同じく金水 2000 で用いられている「ついさっき (A) したので、当然今 (A) している」を使用した。

以下、調査から得られた用例を示したあとで、各タイプの説明を行う。

○Aタイプ:

[+過程の時間的な幅] [+過程の終了] [+結果状態] [+結果状態の終了]

家出中 開会中 帰国中 帰宅中 係留中 収容中 乗車中 駐車中 停止中 停車中 封鎖中

過程に持続があり、過程の終了後に結果状態に移行し、その結果状態の終了が特定できるタイプである。このタイプは、基本的に過程・結果状態どちらの用法も可能である。

「帰宅中」には“帰宅途中”と“帰宅後”の2通りの解釈がある。“帰宅途中”の解釈は過程に着目した用法で、“帰宅後”の解釈は結果状態に着目した用法である。「一時帰宅中」のように、「一時」を伴うと結果状態の解釈が強くなる*8。

ところが、「化粧(する)」は、過程・結果状態のどちらの用法も持っているわけではない。「化粧している」は、化粧をしはじめてからしおわるまで(過程)も、化粧したあと化粧を落とすまで(結果状態)も意味することができるのに対し、「化粧中」は、過程の用法のみ持っていて、結果状態の用法を持たない。

- (3) 彼女は今、控え室で化粧している。(過程の持続=進行相)
- (4) 彼女は控え室で化粧中だ。(過程)
- (5) 今日の彼女はぱっちり化粧している。(結果状態の持続=結果相)
- (6) *今日の彼女はぱっちり化粧中だ。(結果状態)

結果状態の用法の(6)は不自然ではあるが、仮に、「化粧中」で、結果状態の用法

*8 結果状態に時間的な幅があれば必ず「一時」が共起できるわけではない。柏野 1979 には、「一時」は過程の用法では用いられず、結果状態と結びつきが強いと言及がある。しかし「中」に先行できる瞬間無意識動詞「妊娠」「失業」「故障」でも、「*一時妊娠中」「*一時失業中」「*一時故障中」は不自然になる。「一時」は、単に結果状態に限定できる時間的な幅があればよいのではなく、意思性も関与しているためだと思われる。

の例があったとしても、本稿の主張が崩れることはない。Aタイプには、そもそも、過程にも結果状態にも限定できる時間的な幅があるので、つまり出来事自体は「中」で取り出せる時間的な幅を持つので、そのような例が存在しても、問題にはならない。過程と結果状態の一方が欠ける動名詞の特徴は、まだ分析を進めていないが、現段階では、「化粧（する）」という動名詞が固有に持っている、語彙的な問題だと考えている。この他に「包装（する）」も、「化粧」同様、過程のみの例である。

このAタイプには、他に「設置」「掲揚」などがある。

○Bタイプ：

[+過程の時間的な幅] [+過程の終了] [+結果状態] [-結果状態の終了]

発酵中

過程に持続があり、過程終了後に結果状態に移行するが、その結果状態の終了が特定できないタイプである。そのため、過程の用法はあるが、結果状態は、限定性を欠くため、こちらの用法はない。

このタイプは、過程が持続し、結果状態が非可逆的である語が当てはまる。「変色」「(熱帯雨林の)再生^{*9}」「熟成」などが挙げられる。「試薬をかけた断面が(徐々に)変色している最中だ」が許容でき、過程に時間的な幅があることがわかる。過程は限定性を有しており、「試薬をかけた断面が(徐々に)変色中だ」が許容される。そして、「日にさらしていた紙が変色したので、当然今変色している」は許容できることから、結果状態を持つと言える。しかし、普通、変色した紙が変色する前の状態に移行することはありえない(結果状態の終了が限定できない)ので、結果状態を時間的な幅とする[*日にさらしていた紙が変色したので、当然今変色中だ]は許容できない。

「中」を扱った先行研究は、AタイプとBタイプのように、過程も結果状態も時間的な幅があるタイプの動名詞を取り上げてこなかった。本稿は、これを含めて記述することによって、新たな知見を得ることができた。

○Cタイプ：

[+過程の時間的な幅] [+過程の終了] [-結果状態] [-結果状態の終了]

*9 録音・録画機器の「再生」はCタイプに分類される。

アタック中 オンエア中 お仕事中 コーナリング中 ゴルフ中 ジョギング中
ドライブ中 パトロール中 ミーティング中 ランニング中 リハビリ中 レース
中 移行中 移動中 育児中 一周中 運航中 運転中 運動中 運用中 営業中
演出中 演説中 遠征中 仮眠中 稼働中 介護中 会見中 改修中 改造中
改築中 開催中 開発中 外遊中 活躍中 観戦中 休暇中 休学中 休業中 休
憩中 休職中 吸引中 急伸中 求職中 給食中 協議中 協定中 勤務中 訓練
中 係争中 係属中 継続中 計画 計算 警ら中 警戒中 警備中 兼任中
建設中 検査中 検討中 研究中 研修中 交際中 公開中 公判中 工事中
考慮中 航海中 航行中 行進中 合宿中 再建中 裁判中 在学中 在籍中 在
宅中 在任中 作業中 作成中 策定中 撮影中 参加中 散策中 散歩中 仕事
中 使用中 子育て中 思案中 試験中 試合中 試作中 治療中 執筆中 実験
中 実施中 主演中 取り調べ中 取材中 手術中 手続き中 手配中 受け付け
中 受験中 授業中 修行中 修理中 渋滞中 宿直中 出演中 出征中 出席中
出張中 準備中 巡視中 処理中 上映中 上演中 上昇中 食事中 審議中
審理中 新築中 進行中 尋問中 推移中 推進中 戦争中 洗浄中 選挙中 捜
査中 走行中 造成中 存命中 対局中 待機中 待命中 滞在中 中継中 駐在
中 駐留中 聴取中 調査中 調整中 調停中 追跡中 通過中 通学中 通勤中
通行中 展開中 点検中 努力中 当直中 逃走中 闘病中 特訓中 独走中
入居中 発行中 発車待ち中 発売中 搬送中 避難中 飛行中 病欠中 服役中
物色中 奮戦中 勉強中 保管中 募集中 放送中 訪欧中 訪韓中 訪米中
訪問中 訪露中 模索中 輸送中 優勝争い中 遊泳中 要請中 来日中 留学中
留守中 留置中 旅行中 臨検中 歴訪中 練習中 連載中 連勝中 連覇中
連敗中 労働中

過程が持続したのちに終了し、その後結果状態が生じないタイプである。使用例を分類すると、このタイプに属するものが圧倒的に多い。「今高速道路を走行している最中だ」は自然な文なので過程に時間的な幅はあるが、「*つい先ほど走行したので、当然今走行している」は非文であり、結果状態は生じない。結果状態を持たないが、過程の終了は特定できるので、過程の用法のみ表す。「一時間だけ走行する」「一時間だけ出演する」のように「一時間」とはっきりした期間が示せるので、限定できる。

水野 1984 で「状態を表わす動詞」として扱われている「滞在・滞米・滞日・在

学・在任・留守・存命」も、終了が特定できるので、このタイプに含める*10。

○Dタイプ：

[+過程の時間的な幅] [-過程の終了] [-結果状態] [-結果状態の終了]

用例なし*11

惑星の「自転」「公転」や「呼吸」は、終了する、いずれ止まるとは考えられない。感情や感覚を表わす「失望」「心配」「尊敬」なども、明確な終了が特定できない。いつをもって「失望の終了」「尊敬の終了」と判断すべきか、はっきりしない。大和田 1997 は、主体的な精神的活動を表す動名詞は、いつが終了だかわからないので、「中」に先行できないと言及している。同様に状態動詞である「存在」も、語彙的に存在し終わりを含まないと考えられる。そのため、このタイプの動名詞は、限定されうる時間的な幅がなく、「中」に先行できない。

○Eタイプ：

[-過程の時間的な幅] [+過程の終了] [+結果状態] [+結果状態の終了]

リストラ中 拒否中 禁漁中 拘置中 拘留中 更新中 失業中 就寝中 就任中
出向中 処分中 上告中 申請中 逮捕中 停泊中 入院中 妊娠中 閉館中
別居中 保護中 亡命中 猶予中

過程は瞬間的に終了してしまい（開始限界と終了限界が同時）、時間的な幅がなく、過程終了後に生じた状態が一定期間持続するタイプである。典型的な瞬間動詞

*10 動名詞ではないが、「釣り中」という例が見出して用いられていた。

(i) 中学1年男子が水死 釣り中に転落？ 大阪・大正内港で

*11 動名詞ではないが、「喜び中」という例が見つかった。「喜び（喜ぶ）」をあえて分類するならばDタイプになろう。店に張り紙をしているようであり、「商い中」とかけたのかもしれないが、本稿筆者には不自然に感じられる。川柳という文体上の性質や型破りな表現が斬新さを生み出すという効果を狙った可能性などが考えられるが、作られた経緯やこの句の解説など、手がかりがなく、真意は不明である。

(ii) 「喜び中」張り出し一日飲み交わす

はこのタイプに属する。先に示した用例のほかに、「故障」「凍結」「入院」などが挙げられる。

2節で「故障中」を不自然でないとした研究(水野 1984, 大和田 1997)は、「故障」をここに分類すると思われる。「故障」の主体である機械が、意思的でなく、直接働きかけをしなくても、間接的に、誰かの手によって修理されれば、故障した状態は終了する(直る)からである。本稿も、「故障」をこのEタイプに分類するのが妥当だと考える。

○Fタイプ:

[－過程の時間的な幅] [+過程の終了] [+結果状態] [－結果状態の終了]

用例なし

このタイプも過程が開始と同時に終了し、その後で結果状態が生じる。そこまではEタイプと同じだが、こちらはその結果状態が終了することを語彙的に含んでいない。

このタイプに分類される語として「結婚」「離婚」「死亡」や「成立」「就任」「設立」などが挙げられる。「彼は先日結婚したので、当然今結婚している」と言えるため、結果状態を持つと考えられるが、「結婚は一度してしまうとその時点では、その状態が終わるとは一般に考えられない」(大和田 1997, 39 ページ)ため、結果状態があっても「*結婚中」は許容されない。もし仮に「結婚中」が使われたなら、別れることが前提のように聞こえる。水野のように「仮りに、結婚しても一定年齢になったら必ず離婚するという習慣のある社会」(水野 1984, 91 ページ)を想定するなど、次の5節で示す条件を満たさない限り、「結婚中」は許容できない。

2節で「故障中」を不自然とみなした柏野 1979, 国広 1991, 岩野 1994 が、本稿の分類を用いて「故障」を分類するなら、このタイプに分類すると思われる。主体が意思をもっていなければ、結果状態が限定性を持たず、「中」に先行しないと考えるからである。つまり柏野らは、「故障」の素性を[－結果状態の終了](結果状態の終了が特定できない)と捉えているのである。しかし、Eタイプの最後でも述べたとおり、「故障(する)」は、主体の直接的な働きかけなしでも結果状態の終了が想定できるため、Eタイプに分類するのが適当なのである。

○Gタイプ：

[-過程の時間的な幅] [+過程の終了] [-結果状態] [-結果状態の終了]

優勝中

過程の時間的な幅も、その後の結果状態もないタイプである。「退学」「卒業」「発見」「到着」「発射」「命中」「集合」「目撃」「一瞥」などがこのタイプに属する。

「*今、退学している最中だ」が許容されないため、過程に持続がないことがわかる。「*生徒たちは先日卒業したので、当然今卒業している」も許容されず、結果状態も生じない。それ故に、このタイプの語は、過程にも結果状態にも時間的な幅がなく、「中」を伴うことができない*¹²。

しかし、使用例の中に「優勝中」が見られた。これは、5節で示すように、「動名詞+中」以上のレベルで、動名詞が「中」に先行するのに必要な条件を満たしているからこそ許容される例なのである。詳しくは5節で述べる。

以上、動名詞をAからGまでの各タイプに分類し、それらが「中」に先行できるかどうかを見てきた。具体的には、動名詞が [+過程の時間的な幅] [+過程の終了] という素性の組み合わせ（ABCが該当）か、もしくは [+結果状態] [+結果状態の終了] という素性の組み合わせ（AEが該当）のとき、(1)の条件に合致するため、「中」に先行できるのである（以下に(1)を再掲する）。

(1)動名詞が「中」に先行するための条件：

動名詞の指し示す出来事の動作過程や結果状態が、限定されうる時間的な幅を持つ

*12 「退学している」の場合、退学したという結果はなく、経歴とでも言うような抽象的なものが残るだけである。「退学している」は、「彼は3年前に高校を退学している」のようにパーフェクト相（経験相）にはなるが、結果相には解釈できない。パーフェクト相は、「中」の説明に必要なものではないため、これ以上は立ち入らない。工藤 1995、金水 2000 など参照。

5. 「動名詞＋中」以上のレベルで許容される条件

「動名詞＋中」のレベルでは、限定できる時間的な幅を持たず、「中」に先行できない動名詞でも、文・文章のレベルで、時間的な幅を作り出すか、限定する要素があれば、「中」に先行できる。

終了が特定できない場合、終了が特定できるような文脈を与えれば許容度が上がる。「結婚中」は、「動名詞＋中」が許容できないFタイプであった。Fタイプは、結果状態は生じるが、その終了が特定できないタイプである。これは、結婚したらその状態は終わらないとみなされているからである。しかし実際は婚姻関係が破綻することもある。特に、言及事態が過去のことであれば、結婚の終了は実際に行われたものであり、そこには明確な終了がある。よって、離婚後（結婚の終了後）だとわかる文脈を持った(7)の「結婚中」は、許容できる。

(7) 離婚した彼女なんだが、前の夫との結婚中はけんかが絶えなかったようだ。

また、一般的には瞬間的だとみなされる過程の時間を引き延ばすことで、過程に時間的な幅を読み込み、使用されるものも見受けられる。以下の例は、書名からわかるように「離婚係争の最中」を「離婚中」で表現したものである。

(8) 離婚中に、しっかりやること

(『池内ひろ美の離婚相談所―「迷ったとき」「係争中」「離婚後」かしこい対処のポイント』(日本実業出版, 1997) 目次より。傍線・波線は本稿筆者による)

そして、瞬間的な出来事を複数集めることによって、時間的な幅を生むこともある。「優勝」「到着」はGタイプに属する語であり、本来Gタイプは「中」に先行できない。しかし、物や出来事の複数性を示す「連続」「いろいろ」「続々」「次々」などと共起することによって、はじめて優勝してから現在まで継続していることを示すことができる。もちろん、時間的な幅があるだけでなく、連続記録が途切れるときを終了として特定でき、限定も可能である。(9)は新聞記事の調査で見つかった、Gタイプ「優勝中」の例である。

(9) 特にほめられる成績ではないが目下4年連続優勝中。(毎日新聞)

(10) 本場USショップより、最新のアイテムがいろいろ到着中!（広告コピー）

「連勝」「続出」は、語レベルで複数化されている（「連」「続」が複数性を表す）。
「連敗」「続発」も同様である。

(11) 初の首位を目指す2位のセ大阪は13位のガ大阪が相手で、対戦成績も4連勝中と相性がいい。（毎日新聞）

(12) 本物時代が幕をあけた一究極の技術やシステムが続出中（書名）

6. まとめ

本稿の主張をまとめると、次のようになる。

- ① 「中」に先行する動名詞は、動名詞の指し示す出来事の動作過程や結果状態が、限定されうる時間的な幅を持っている。
- ② ①について) 具体的には [+過程の時間的な幅] [+過程の終了], もしくは [+結果状態] [+結果状態の終了] という素性の組み合わせになっている。
- ③ Aタイプの動名詞は、基本的に、過程にも結果状態にも、限定できる時間的な幅がある。しかし、動名詞によっては、いずれかが取り出せない場合もある（「化粧中」は、結果状態の用法が不自然）。
- ④ 「動名詞+中」のレベルでは「中」に先行できない動名詞（DFGタイプ）でも、「動名詞+中」より大きなレベルにおいて、時間的な幅を作り出すか、無限の時間的な幅を有限にすることで、「中」を伴うことが可能になる。

参考文献

- 青木三郎・竹沢幸一編 2000『空間表現と文法』くろしお出版
グループ・ジャマシイ編 1998『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
Iida, Masayo: 1987, 'Case-Assignment by Nominals in Japanese', in M. Iida, S. Wechsler
and D. Zec (eds.), *Working Papers in Grammatical Theory and Discourse
Structure*, Center for the Study of Language and Information, Stanford.

- 伊藤たかね・杉岡洋子 2002『語の仕組みと語形成』（原口・中島・中村・河上編 英語学モノグラフシリーズ 16） 研究社
- 岩野靖則 1994 「「～中」の用法について」『大谷女子大学国文』24
- 影山太郎 1993『文法と語形成』ひつじ書房
- 柏野健次 1979 「『故障中』の意味論」『大阪樟蔭女子大学論集』16
- 金田一春彦 1950 「国語動詞の一分類」『言語研究』15（金田一春彦編（1976）『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 に再録）
- 金水敏 2000 「時の表現」（金水敏・工藤真由美・沼田善子『時・否定と取り立て』（日本語の文法2）） 岩波書店
- 工藤真由美 1995『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 国広哲弥 1991 「故障中」『日本語誤用・慣用小辞典』講談社学術文庫 1042
- 益岡隆志・田窪行則 1992『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 松岡知津子 2004 「複合動詞「～スル」を形成する漢語名詞について」『日本語教育』120
- 宮地裕 1973 「現代漢語の語基について」『語文（大阪大学国文学研究室）』31
- 水野義道 1984 「漢語の接尾の要素「～中」について」『日本語学』3-8
- 森田良行 1984『基礎日本語3—意味と使い方』角川書店（1～3をまとめた、『基礎日本語辞典』（1989 角川書店）に再録）
- 森山卓郎 1986 「接辞と構文」『日本語学』3-5
- 森山卓郎 1988 「アスペクトの分類」『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 文慶喆 2000 「『漢語語基+中』の構成と意味」『言語科学論集（東北大学文学部言語科学専攻）』4
- 永田高志 2001a 「『故障中』の社会言語学」『文学・芸術・文化（近畿大学文芸学部）』12-2
- 永田高志 2001b 「続『故障中』の社会言語学」『文学・芸術・文化』13-1
- 仁田義雄 1980『語彙論的統語論』明治書院
- 大島資生 2003 「動名詞節について」『東京大学留学生センター紀要』13
- 大和田榮 1997 「接尾辞「～中」とその造語性」『東京成徳短期大学紀要』30
- 鈴木高志 1991 「X I 名詞と「～中」からなる複合語について —「アメリカ訪問中」の形成の問題を中心に—」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 12 名詞辞書にかかわる諸問題』情報処理振興事業協会
- 丹保健一 2001 「現代日本語における漢語系接尾辞『～中（チュウ）』『～中（ジュウ）』の使い分けをめぐる」『国語語彙史の研究』20

丹保健一 2003 「「(～+)『動詞連用形』+中」をめぐって」『金沢大学語学・文学研究』30
・ 31

Tsujimura, Natsuko: 1992, Licensing Nominal Clauses: The Case of Deverbal Nominals in
Japanese, *Natural Language and Linguistic Theory* 10.

Vendler, Zeno: 1967, *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press.

ウインター（山崎）良子 1973 「中（ちゅう）と中（じゅう）の使い分けについて」『立
教大学日本文学』30

さえき あきのり／人文社会科学研究科
(2005年8月1日 受理)